

2006年10月31日

「浦安図書館読書日記」によろこそ。 藤田 仁



Posted by aanu_fujita2 at 20:59 | [Comments\(0\)](#) | [TrackBack\(0\)](#)

2006年10月22日

10/22 「コルナイ・ヤーノシュ自伝」 盛田常夫・訳 日本評論社

本にはそれを手にした途端に期待に胸が膨らむ直感を与えかつ期待通りの満足感と共に読み終えさせる著作があります。本書は正にそうした本の一冊でした。1928年生れのユダヤ系ハンガリー経済学者コルナイ・ヤーノシュ。彼は少年時代ホロコーストの魔手を辛くも逃れ(父親はアウシュビッツの犠牲者)戦後はマルクス経済学を習得して優秀な共産党機関紙記者。しかし10年を経ぬ内に社会主義に対する懐疑が芽生えて体制とマルクス経済学に決別。政治に距離を置き独学で西側現代経済学を学び苦難と厳しい制約の中で次第に西側学界と交流。ハンガリー科学アカデミー会員として国内の体制転換に多大の影響を与えたのみならず東側の実態を知る貴重な経済学者としてハーヴァート大学を始め多くの研究機関で学績を挙げた稀有な人材です。著作で言えば計画経済の欠陥を衝いた「過度集中化」から始まり現代経済学一般均衡理論に対比する「反均衡の経済学」や「不足の経済学」で不足経済を通して社会主義経済の本質的欠陥を究明しかつ包括的に描写したのです。即ち「社会主義の信奉者が唱えるような期待はどのような現代的な技術を使っても社会主義の計画化では実現できない」「人間の顔をした社会主義は希望に過ぎない」(文中から引用)。

考えて見れば「人間の欲求を基盤とする資本主義が内包する矛盾を解明しそれを合理で克服」しようとするマルクス経済学の思想は人間の理性が産んだ19世紀の最高傑作でした。しかし150年間の歴史の結論は政治的にも経済的にも惨めな失敗だったのです。政治的には権力的専制や特権官僚制との不可避の結びつき(そうでない例は皆無です)。そして経済的には公有と官僚的調整システムは私有と市場システムに対して効率と生産性において先天的・絶望的に劣っていたということなのでしょう。もし

かしたらレーニンが言った通り「資本主義の生産性を凌駕すれば社会主義は勝利」したかも知れませんが、しかしコルナイの指摘する通りそれは理論的にも現実的にも「不可能性定理」だったのです。社会主義には圧制と貧困が払っても払っても纏わりついてくる宿命と資本主義体制に負けず劣らずの道徳的廃類が存在し、それはもしかしたら「世の中に絶対に同じ「個」はない」との「公理」に根源的に反する制度だからかも知れません。

コルナイの姿勢は終始一貫しています。68年頃からハンガリーでも厳格な社会主義経済が緩み出して「新経済メカニズム」「市場社会主義」が出現しましたが「偽の市場経済」に対して彼は手厳しく評価していました。彼は政治的発言は控えていたものの例えば「不足の経済学」が人々の物の考え方に与えた影響は大きく遂に完全な体制転換に至る潜在原動力の一つになったことは間違いありません。コルナイ・ヤーノシュは稀に見る誠実な努力家であり前向きな姿勢と楽観主義の人です。そして自省の人（各章の最後には必ず自省の項がある）であり迫害に会っても亡命せずに故国に止まりハーヴァート時代も年の半分は帰国する愛ハンガリー人です（愛国とはちょっと違う。何故なら「国」はドイツ占領時代—社会主義国—体制転換後と3回も大変換している。その間彼は決してハンガリーを離れることはない）。人口僅か1,000万人のハンガリー人は多くのノーベル賞受賞者を輩出している優秀な民族です。科学者は有名なノイマンから大道芸をしながら日本に定住した数学者まで。そしてリスト、コダーイ、バルトーク、セル、ショルティ等の音楽人、米富豪ソロスなどなど。この国に生れた一人の有能人が語る稀有な体験を縁もゆかりもない人間が共感できる読書の素晴らしさを本書で改めて実感いたしました。欧米人の自伝は退屈な記述とニュアンスの伝わらない訳文で途中で投げ出したくなるものが多い中で本書は原文が整理されて書かれている点もあるでしょうが非常に解りやすい訳文で助かりました。

明日はナジ・イムレ等の改革と犠牲から丁度50年。かつての時代には触れたくないとのブダペスト市民の様子が先日の新聞に載っていました。ここにも「風化」があるようです。